様式第２号

視察研修先	栃木県大田原市	氏名	後藤健一郎
視察研修項目	旧蜂巣小学校の利活用について （多機能型障がい福祉サービス事業所として活用）		

今回の厚生文教常任委員会の視察研修では「（統廃合したあとの）校舎の利活用」について、様々なケースを視察研修させていただくことにした。これは委員会でテーマを決める時にも発言したが、これから小中学校の統合が目に見えており、閉校してからその利活用を検討したのでは、校舎が傷んでしまう空白期間が出てしまうし、閉校時に説明会などを行った際に「今後この校舎は、このように活用していきます」と説明できた方が、地元住民にも受け入れられやすいと思われるからだ。また、どのように使うのかがある程度わかっていれば、今後必要となる維持改修についても、計画的に行うことができる。

それらを念頭に、今回は様々なケースでの校舎の利活用方法を学んできた。

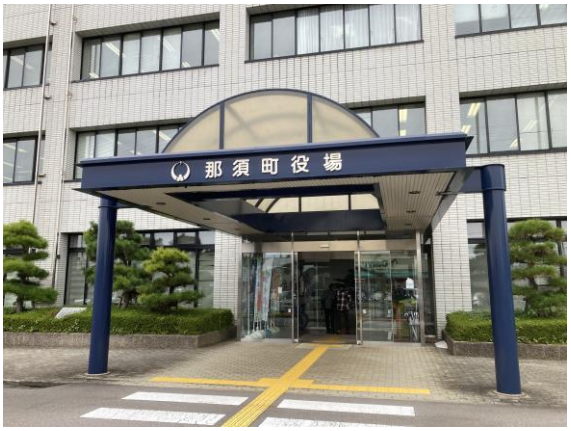
■校舎を障がい者が働く「カフェ」として利活用

栃木県大田原市の旧蜂巣小学校は、2012年に廃校となり、その校舎・校庭といった「学校らしさ」を残したままカフェにしている。そのカフェもただ単に食事を提供しているのではなく、福祉サービス・障がい者就労支援の拠点に転用することで、利用者の「働く・活動する」場、障がい者就労支援Ａ型事業所（寒河江市で似ている施設は、cocoCafeやノバリアクライミング）になっている（カフェのバックヤードでは、Ｂ型として焼き菓子などの製造もしている）。

また、このカフェが素晴らしいのは、ただ単に「障がい者就労支援」というだけではなく、コロナ禍前は年間約３万人（現在は約２万人）、客単価は1,800～2,000円と、カフェ単体としてもしっかりと稼げており、就労者にＡ型・Ｂ型の全国平均を上回る賃金を支払って支援しており、福祉と地域振興・地域活性化をしっかりと担っている拠点になっている点も高く評価すべきである。

その他、大田原市では現在までに廃校となった校舎は10か所あるが、この10か所すべてにおいて、すでに民間事業者や市の担当部局による活用がなされているのも特筆すべき事項だ（一部中止や縮小もあり）。これらの廃校を地域の活性化や福祉、産業振興に活かしており、特に民間活力を導入している点が素晴らしいのだが、ほとんどのケースで、やる気を持って事前協議に訪れている企業さんとしっかりと打ち合わせ・確認しながら進めるのがポイントとのことだった。

視察研修先	栃木県那須町	氏名	後藤健一郎
視察研修項目	旧朝日小学校の利活用について （高齢者向けの住居やデイサービス・那須町づくり広場）		



■校舎及びグラウンドを高齢者住宅として活用

那須町では、小中学校適正配置計画を平成21年に策定（平成24年に見直し）し、４中13小の17学校を、２中６小の８校に再編している。差し引き９校の旧校舎が残るが、うち保育園、町の支所、子育て等の公共複合施設と、公益性が高い利活用が１ヶ所ずつ、２ヶ所は未定（解体も視野）、残る４ヶ所を民間による利活用を行っている。

2020年地域づくり・国土交通大臣賞、2022年ふるさとづくり大賞・総務大臣賞を表彰されている栃木県那須町の旧朝日小学校を再活用した「那須まちづくり広場」の素晴らしい点は、旧小学校を「人生100年時代を支える多世代共生のまち」と銘打ち、一つの街のように利活用している点にある。

校舎は高齢者向けのデイサービス（１Kの長屋・下宿のような作り）や障がい者就労支援、放課後等デイサービス（子ども支援）といった多様な福祉サービスが集約されており、校庭には、自立・介護対応のサービス付き高齢者向け住宅やセーフティネット住宅（賃貸住宅）も整備され、「住まい」と「ケア」が一体となっている。

また、「楽校」と銘打った交流拠点では、常にイベントが行われており、自分自身が楽しむだけではなく、地域活動やボランティア、子どもたちとの交流等、高齢者が社会から孤立せず、生きがいを持ち続けられる環境にもなっているようだった。

那須町では旧校舎利用についての優先順位を定めており、

１．学校または教育施設としての利用（改修等の必要性が低い）
２．公共施設としての利用
３．NPO法人や民間企業への貸付（雇用創出や地場産業等の振興に資するものを優先的に検討）
４．解体及び売却

の４段階で決めているとのこと。今回の旧朝日小学校は学校や公共施設としての利用予定がないことから民間企業へ貸付となった。実際には温泉とらふぐの養殖、日本語学校と、３件の応募があった中から事業の有効性や実現性・継続性、地域への貢献度等からこちらの事業所になったとのこと。県外からの移住にも一役買っているほか、デイサービスなどを通じて介護重度化予防も担っているとのことだった。

視察研修先	宮城県白石市	氏名	後藤健一郎
視察研修項目	旧白石南小学校・白石南中学校の利活用について （学びの多様化学校・白石きぼう学園）		

■東北初、全国でも２例しかない、公立小中一貫校の学びの多様化学校。
不登校児童生徒数は 11 年連続で増加しており、特にコロナ禍以降急激に増えている。2023 年度の小・中学校における不登校の児童生徒数は、前年度から約 15.9%増加し、過去最多の 34 万 6482 人になった。

寒河江市では現在「寒陵スクール」を勤労青少年センターに設置し、不登校の小中学生を対象とした学びの場を確保し、社会的な自立に向けて再出発できるよう支援している。（不登校児童生徒が増加傾向にあることを受け、今年度予算を拡充し、教育相談員や訪問相談員、別室担当者の配置体制を強化）。

寒陵スクールは、学校に籍を残したまま、心理的な居場所づくりや学習支援（出席扱い）を行いながら元の学校への復帰を目指すことが主な目的であるのに対し、学びの多様化学校（不登校特例校から名称変更）である白石きぼう学園は、文部科学大臣が指定した、不登校の生徒の実態に配慮して柔軟で特別なカリキュラムを編成できる学校である。

校舎は旧校舎をそのまま活用。ゆったりとした空間で木材や吹き抜けを活かした設計（写真参照）になっている。同校は「学校らしくない学校」をコンセプトに掲げており、従来の学校の規則である「毎日同じ時間に出席」「制服」「定期テスト」にこだわらず、子ども一人ひとりの状況・ペースに寄り添った運営を行っている。朝は午前９時 20 分からと通いやすいスタート時間（市街地からスクールバスを運行）で、授業時間数は「午前３時間＋午後２時間」。途中で辛くなったら職員が付き添いながらクールダウン（専用スペースも設けられている）を行うことができ、不登校・通学困難を経験した子どもたちが“自分のペース”で学びを再開できる環境として非常に有効だと感じた。

どうしても授業に出ていない分、不登校児童は学力に不安を抱えることになる。その点について質問させていただいたのだが、基礎を補うための「白石タイム」という時間を設け、苦手や未習部分を丁寧にフォローしており、小中一貫校だからこそできるのだが、中学生であっても小学校の算数が苦手（先に進めない）なら、この白石タイムでまた学び直すことができるのは非常に素晴らしいと思った。

令和５年３月に、文部科学大臣が

１．不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整える。

２．心の小さなSOSを見逃さず、「チーム学校」で支援する。

３．学校の風土の「見える化」を通して、学校を「みんなが安心して学べる」場所にする

ことにより、誰一人取り残されない学びの保障を社会全体で実現していくとした「COCOLOプラン」をとりまとめ、不登校対策の一層の充実、速やかな推進を指示している。

子どもが減っているのに不登校児童が増えているという状況下において、「選べる学校・多様な学びの場」を整備することは非常に重要である。

私もこのことについては以前から関心が高く、昨年山形市で行われた「登校拒否・不登校を考える夏の全国大会2024」にも参加したが、不登校の生徒は、一部の特別な子どもでもないし、白石市にだけいるわけでもない。極々普通の、どこにでもいる子ども達であり、今学校に通っている子がいつ不登校になってもおかしくないし、いつ復帰してもおかしくない。

「不登校」「通学困難」「学び直し」など、学校制度の枠にあてはまりにくい子どもたちへの受け皿として、制度的にも新設された学びの多様化学校を設置して活用すれば、子どもたちは自信を持って学校に通うことができ、保護者はしっかりと仕事ができる（半沢教育長さんは「不登校児童の保護者は、職場に行くこともできず、ずっと一緒にいる“子どもの介護状態”である。今通っている児童の保護者からは、自分の仕事が持てるようになった、家で子供を迎えられるようになった、子どもの変化について人に話すことができるようになったと、プラスの変化が起こったと感想を頂いている」とお話しされていた）と、非常にいい環境になるのではないかと思った。

認定校を取得するというハードルはあるが、学校から学校への転用であるため、他の用途に転用するよりは諸手続きが少なく、またリノベーション費用も低く抑えられると思われるし、何よりさがえっ子を誰一人取り残さないようにする学びの場を作ることは、将来の寒河江市にとって「価値あるよい投資」であると思われるので、ぜひ実現に向けて私も取り組んでいきたい。